

帰ってきたアルバイト探偵^{アイ}

渋谷の街はいつも通りの人混みだった。歩いている人間の三十パーセントは学生で、九十パーセントは「貧乏人」、六十パーセントの頭の中には、「今夜いい女（男）」とやる」ことしか詰まっていない。

宇田川町の、ポリボックスを境にふたまたに分かれる登り坂に僕は立っていた。

渋谷にはふたまたの道がやたら多い。道玄坂と宇田川町は特にふたまただらけだ。恋人をふたまたかける者、学生とアルバイトのふたまたをかける者、カタギと犯罪者のふたまたをかける者、そんな人間ばかりが集まってくる。でも、人生の登り坂と下り坂をふたまたかけられる者はいない。

僕が立っていたのは、道こそ登り坂だったものの、あきらかにまちがいなく、人生の下り坂を進む奴が通る方の道だった。

時刻は午後七時、月曜日。コヨミの上では秋だけど、夕方の渋谷にはいつだって夏しかない。今また、人生の下り坂を転げ落ちようかというアホがひとり、僕に近づいてくる。目印である、僕のヤンキースのキャップをめざして。

そいつは色つきの眼鏡をかけ、妙に暑苦しい格好をした高校生だった。フード付の厚手のパーカを着るには、季節が早すぎる。でもそのフードが必要だったこともわかっている。ショップの防犯カメラから顔を守るためだ。だぶだぶのパーカの腹の中には、おそらく近所のレンタルビデオショップでビデオを借りたときにいつしよについてきたナイロン製の袋が入っている。でもその袋の中身は、そいつが好きなホラービデオでもAVソフトでもない。

眼鏡の奥の目は妙にふてぶてしく、ナメンナヨという強気の視線を発している。いいのかね、高校生がこういうビジネスの交渉にばかり長けていて、今の日本で。

そいつは僕に近づいてくるとさりげなくあたりを見回した。

「やあ」

僕は初対面なのに、てんで仲良しのふり。近くのビルの軒下にそいつを誘導し、もっていたシヨルダーバッグの口を開いた。服の中からでてきたナイロン袋の中身を、そいつはばさばさとバッグの中に落としこんだ。

あまりまっとうとはいえないバイトに精をだすリュウ君。

「何本？」

「ゲームが四本、DVDが六本」

そいつがつぶやいた。僕はバッグの底でタイトルを確認した。

「どれも新作だよ」

怒ったようにそいつがいった。

「はいはい」

ポケットから一万円札をだした。そいつは万札をさっとパーカのポケットにつっこみ、いった。

「おたくより条件のいいところが最近できたんだぜ。一本千二百円だしてくれるんだ。『社長』にいとけよ。勉強しないと潰されるよって」

あくまで強気。

「そりやどうも」

僕がいうと、そいつは肩をそびやかし、歩き去っていった。僕はため息をつき、バッグを肩にかけ直した。坂を登って、右に折れ、小さな雑居ビルの前にでる。月単位で部屋を貸す、レンタルオフィスに、今の僕のバイト先がある。

ドアには「(株) 未来開発」なんてプレートが掲げられているけれど、実際は架空の会社だ。

ドア横のインターホンを押し、

「冴木です」

と告げると、中からロックが外された。

オフィスの中は、八畳ほどのワンルームで、デスクがひとつ、安物の応接セットが二組おかれている。そのひと組で今、「社長」が二人の女子高生を相手に、ビジネスストークのまっ盛りだった。

「もう、近所に銀行ない？ そっか、じゃあしょうがないね。ケータイショップは？ ある。よかった。じゃ今度、ケータイ、契約してきてよ。新規で。今日作った、太平洋銀行の口座使っているから。大丈夫、大丈夫。お金はこつちが全部持つから。そしたら一本、五千元で買おうよ」
応接セットのテーブルには、二人が新しく開設した口座の通帳とキャッシュカードが四組おかれている。社長はそれを一組五千元で買う。
「どうするう」

「いいよ、あたし。ケータイショップなら、家の近くにあるから」
「じゃ、そうしてよ。はい、これ」

社長はさっさと現金をだす。四組ぶんの通帳代金二万に加え、新しい携帯電話二台ぶんの一万円。

お金が入ったら買いたいものの順番がその一から、その十二くらいまでリストができあがっている子たちには効果テキメン。

「明日って、六時限なんだっけ」

「日本史。ツチャの」

「あ、じゃばつくれるね」

「楽勝」

「明日、もってくるね。新しいケータイ」

「よろしくう」

社長がにこやかに手をふる。女子高生二人は立ちあがると、勤労高校生の僕には目もくれず

に、オフィスを立ち去った。キャップを目深にかぶってるし、同級生からも援交させそうな彼女らに無視されたとしても、さしてプライドも傷つかないリュウ君。

「はい、お帰りの」

社長は笑って、僕を迎えた。三十そこそこ、妙に色が白くてイケメン風で、前身はホストかサパ男、と僕はにらんでいる。もちろん、この社長にここまでのビジネスを立ちあげる頭はなく、バックにはもうちよつと危くて、頭のきれる、本職がついている筈だ。そいつらは渋谷にいる、わずか十パーセントの金持の仲間入りを果たすのが夢。

「これです」

バッグを逆さにして、買いつたばかりのゲームソフトとDVDソフトをテーブルに広げた。もちろん窃盗品、そして僕の罪は盗品故買、バイト料は一本につき五百円。

「じゃ五千元。ご苦労さん。ねえ、近所で工事やってる家ない？ できりゃユニボ使ってるというのだけど」

「捜してみます」

「うん、よろしくね。今日はご苦労さま。来週も今日と同じで、五時にこられるかな？」

「はい」

オフィスにおいてあった通学鞆をとりあげる。

「じゃ、お疲れさま」

手をふる社長に頭を下げて、オフィスをでた。

架空の株式会社「未来開発」の業務は、他人名義の銀行口座や携帯電話の売買、それに万引し

たゲーム、DVDソフトの故買だ。渋谷のクラブの出入口で高校生相手にビラをまき、簡単なバイトだよと誘いこむ。銀行口座は脱税目的のおじさんたちに、携帯電話はいけないお薬の売人さんたちに、高く売れる。もちろん女子高生から買ってすぐではアシがつくから、住所を変えたりもろもろ、専門的な作業は必要になる。

とにかく「現場」にでるのは全員、僕のような高校生。万一、お巡りさんにとがめられたら、宇田川町のどこから僕を見張ってる「専務」が通報。ものの二分で、「(株) 未来開発」は、モスケの殻になる、という仕組み。

「(株) 未来開発」が、新橋や赤坂など、おじさんの街でばらまいているチラシには、「ビジネスチャンスをつかみたいあなたへ。」

匿名口座あります。

アバンチュールを楽しみたくとも、プリペイド携帯が入手困難なあなたへ。

携帯電話あります」

と印刷されている。連絡先は携帯電話の番号で、そこには「未来開発」のみの字もない。

バイトに応募した僕に社長は、

「ニーズに応え、欲しい人へ、欲しいモノを提供する、現代ならではのスキマ産業です」

なんて胸を張ったけど、まあ立派な犯罪会社。しかも万一、おカミが目をつけても、つかまる現場はすべて高校生という頭のよさ。

レンタルオフィスの契約も、どうせすべては偽名で嘘の住所と電話番号で交されているに決まっている。早い話、悪人の、悪人による、悪人のための「産業」。

JRで渋谷から恵比寿にでた僕は、地下鉄に乗りかえ広尾で降りた。そこからまっすぐ、我が家のある広尾サンタテレサアパートに向かってもよかったのだけれど、もうひとつやることが残っていた。

広尾サンタテレサアパートは、バブルが弾けた今となっても、都心の一等地にあり、一階にあるカフェテラス「麻呂宇」が、近くのS女子大のお嬢様がたのたまり場となっている現実を考えると、家賃ひと月十万円はまちがいのないところだ。ここに、相場の十分の一、しかもあるとき払いの催促なしという超好条件で住めているのは、ひとえに大家である「麻呂宇」の圭子ママの好意によるところ。

好意といっても、僕に対してじゃない。僕の親父、それも戸籍上であって、実際は血のつながっていない、生産性ゼロ、勤労意欲ゼロ、性欲満点の、冴木涼介への好意だ。圭子ママの、僕に対する好意は、あつて母性愛、できれば戸籍上の「母」になるのが夢というところだろう。

もちろん、女に目がなく、何より自由ワガママでいることを願う親父が、圭子ママのそんな願いをかなえる可能性はゼロだ。

「危険な職業の男に、家族はいらない」だと。じゃ、僕というセガレはどうなるの、なんて、今さらいう気にもなれないが。

何せ、この不良親父の職歴は華麗で、「商社マン」に始まって、「オイルビジネスマン」、「ルポライター」、「行商人」ときたあげく「秘密課報員」。

ヒミツチョーホーインなんてのは、東西ベルリンの壁が健在だった頃の花形稼業だ。今となつては、バブル崩壊後の銀座の白タク、以上に未来のない商売としか思えない。

この親父の今の仕事は、私立探偵。二階の、僕と親父が暮らす部屋のドアには「サイキ インヴェステイゲイション」というプレートがかかっている。もっともここに仕事をもちこんでくるのは、親父の昔なじみで、今は「歩く国家権力」といわれるほど出世した、内閣調査室の島津さんくらいものだ。そこで親父の仕事を手伝ってきた僕は、

- 一、爆弾を背中にしょわされる
 - 二、殺し屋をおびきだす囮になる
 - 三、遠い異国のジャングルで鱒のエサにされかかる
 - 四、完成途中のジェットコースターで拷問にかけられる
 - 五、撃たれる
 - 六、刺される
 - 七、殴られる、は数えきれない、
 - 八、高校を三年で卒業することに失敗する
- 人生ゲームにたとえるなら、他のプレーヤーとは十二マス以上の大差で、持金、持家ゼロ状態というところ。

とはいえ、四年目の高校生活も、はや半ばにさしかかり、このままいけば何とか卒業証書は手にできそうな気配。さすれば、「歩く国家権力」島津さんに、電話を一本、文部科学省あてにかけていただき、東大推薦入学の労をとっていただいて一発逆転の可能性に賭ける他ない。

僕は広尾商店街を抜けたところで立ち止まった。携帯電話をとりだす。かつて老舗の和菓子屋

さんだった家がとり壊され、整地のために小型の重機が入っていた。シートでおおわれた空き地の端に、パワーショベルがおかれている。

「(株) 未来開発」の社長の携帯電話の番号を押す。

「はいはい」

明るいのりで社長がでてきた。

「冴木です。今、家の近くまで帰ってきたんですけど、ウンボありました。建築現場においてあります」

「それどこ？」

「広尾です。工事は今やってません」

「あ、そう……」

社長は考えていた。この半月間のバイトの成果で、僕は社長に覚えがめでたい。『使える奴』と思われることに成功していた。

「冴木ちゃん、夜、でかけられる？」

「何時頃ですか」

「そうだな……。一時か二時くらい」

「平気ですよ。いつも寝るの、三時くらいだから」

高校生にあるまじき発言。

「じゃ、あとで電話するからさ、でてきて場所教えてくれる？」

「オッケーです」

僕は答えて電話を切った。

小さな工事現場でウンボが使われる期間は短い。このところウンボは、自動車窃盗団の人気ナンバーワンで、簡単に盗めるような、建設会社の庭先などにはおかれなくなってきた。ウンボの人氣がベンツやフェラーリを上回ったのはしごくあたり前で、現金自動預払機ATMをぶっ壊すことができるから。

ベンツを盗んで海外に売り飛ばすより、ウンボを盗んでATMを壊した方が儲かるというわけだ。

工事現場にあるウンボは、毎日移動させる手間を省くため、工事期間だけおかれているものだ。ウンボを必要とするのは、現場の大きさにもよるがせいぜい数日間。見つけたら即かつぱらうのが、プロのやり方だ。おそらく、今夜かつぱらったウンボは、明日の朝、どこかのスーパーマーケットなどの壊れたATMの近くで見つかることになるだろう。

今頃社長は、せっせと知り合いの中国人に電話をかけている。放置されているウンボのありかを知らせるのも、「欲しい人へ、欲しいモノを提供する」立派なスキマ産業。

サンタテレサアパートまで戻ってきた僕は、「麻呂宇」の扉を押しした。

「お帰り、隆ちゃん」

「お帰りなさいませ」

圭子ママと、広尾のドラキュラ伯爵^{ほくしゃく}こと、バーテンダーの星野^{ほしの}さんが迎えてくれる。

「おなか空いたあ」

僕はカウンターに腰をおろしていった。

「ビーフストロガノフ、できております」

星野さんがいう。

「いただきます。親父は？」

「先ほど食事を終えて、二階に上がられました」

おごそかに答える、星野ドラキュラ伯爵。

「隆ちゃん、どう？ この爪」

このところ自前のネイルアートに凝っている圭子ママが両手の指をかざす。金色の下地に、赤いカエデの葉が散っている。秋バージョン。

「うーん、季節の先どり」

如才なく感心してみせるリュウ君。噂では、この広尾サンタテレサアパート最上階にある圭子ママの三LDKは、半分以上が買いこんだドレス、バッグ、靴類で占められているという。大金持の画家の未亡人で、「麻呂宇」はハードボイルド好きのママの趣味からつけられた店名。

「ちょっと早かったかしら？」

「うん？ そんなことないんじゃない。お洒落^{しゃれ}の基本は、人より半歩先にいくことでしょ」

「生意氣いっちゃって」

くすりと笑う圭子ママ。僕としては、何とか駄目親父が、このママと晴れて華燭^{わたく}のウタゲをあげてさえくれれば、生活の安定にたどりつけるのだが。

白系ロシア人の貴族の血をひく星野さんは、カレーやシチュー、ストロガノフといった煮込み料理がめつぼう得意で、エンゲル係数が異様に高い冴木家の家計をひたすら助けて下さる神様

だ。

ストロガノフを平らげ、新しいマルボロライトの封を切って、僕は一服した。留年を機に、煙草の種類をかえてみた。

「コーヒー、召しあがりですか」

「いただきます」

「麻呂宇」の扉が開き、サークルを終えた女子大生の一団が入ってきた。ママは早速、爪を見せびらかしに彼女たちのテーブルへ。

「そういえば、先ほど康子さまからお電話がありました」

ウインナコーヒーの入ったカップをさしだし、星野さんがいった。

「うん？ げっ」

僕は吐きだした。康子こと、向井康子は、タレント学校で有名なJ学園のスケ番だったのだが、僕とは裏腹にめでたく三年で高校を卒業し、J女子短大の文学部に進んだ。今から二年前、康子の死んだ親父さん、戦後日本を代表するブラックジャーナリスト鶴見康吉（離婚した母親の姓を康子は名乗っていたのだ）の「遺産」をめぐる争いに我が「サイキ インヴェステイゲイション」は巻きこまれた。そのときタレントデビューが決まっていた康子だったが、ヤクザ、殺し屋、オカマ、ついには国家権力までが加わった争奪戦にうんざりし、デビューを蹴ってしまった。

だが大学に進学し、匕首を捨てた康子は再びスカウトをうける。今はモデル系の事務所に所属し、前身をちらりともおくびにださず、レースクイーンのバイトに専念する日々。

そういうえば今日は、鈴鹿だか富士のサーキットでのバイトが終わるので、いっしょに晩御飯を食べようという約束をしておいたような気がする。

きつと僕の携帯にかけてきていたのだろうか、あいにく本物の僕の携帯は、バイト中は電源を切つて鞆の底だ。「(株) 未来開発」との連絡に使っているのは、バイト用の、番号のちがう携帯電話なのだ。

あわてて自前の携帯をとりだし、留守録されたメッセージを聞いた。案の定、康子の怒りの伝言、メールがぎゅちり詰まっておる。

「こら、隆、ざけんじゃないよ！ 久しぶりのデートばつくれられると思つたら、大まちがいだかね。これからそっちにカチコミかけつから、待つてなよ」

手負いの熊も全速力で逃げだそうかという迫力。しかしレースクイーンがこんな言葉づかいでいいのかね。

もつとも、康子の話では、サーキットにいつてみたら、昔、シメた子やらタイマン張つた、見覚えのあるスケ番あがりのお姐さんがごろごろいたというから、実はあの業界は、そのてのお嬢さま方の、第二の人生の定番コースなのかもしれない。

この場に康子が殴りこんできたら、血の雨は必至。僕は太急ぎでコーヒーを飲み干すと立ちあがった。

「ごちそうさま」

「あら隆ちゃん、もういくの？」

ママのひと言に、いっしょにいた女子大生たちがいっせいに僕を見た。

おや、こんなかわいい男の子がいたなんてぜんぜん気づかなかったわ、なーんて目線に渋く微笑むリュウ君。

「うん、東大お受験の勉強しなきゃ」
未来のエグゼクティブに今からツバつけとこ、と思わせるべく一発フカして、「麻呂宇」をでる。

外階段で二階にあがった。冴木家の住居兼オフィスのは、たいていいつも開いている。LDKの中央が、親父の事務所、あと二部屋が僕と親父の私室だ。親父の、通称「インランの間」には、僕のママハハになるのを夢見た、幾多の女性の怨念がこもっている。

「大変だよ、オヤジ」

ドアを開けた僕はいった。ロールトップデスクに足をのせ、缶ビールをすすっていた親父は目をあげた。

外見は中背中肉で筋肉質、鼻の下にはトレードマークのちよびヒゲがあるが、ときと場合によって、そのヒゲは姿を消す。変装は、うしろ暗い過去を物語るようになりうまく、その頭の中は、女性のことを除くと、銃器、爆発物、エスピオナーージュ（諜報活動）ワールドの危い知識と怪しい外国語がぎっしり詰まっておる。

いつもの格好、皺だらけのチノパンにTシャツ、そして僕のお古のヨットパーカだ。

「どした？ もう一度留年か。まあ高校生のように成人式を迎えるつても、おつなものかもしれないぞ」

教育意欲のカケラもないセリフをほざく不良中年。

「あのね、誰のおかげで留年したと思ってるの、そんなことじゃないよ。例のバイトのおかげで、康子とのデートすっぱかしちゃったんだよ。さつき留守電聞いたら、ものすごい勢いで怒りまくって、これからカチこんでくるって」

やや事実を脚色して述べることにした。忘れていたのは事実だが、バイトのせいというのはちよつとちがう。

だが女の怒りには僕よりスネに傷もつ親父は、とたんに落ちつかない表情になった。

「お前それやばいだらう。康子怒ったら、かなり恐いし。第一、いつもいつてるじゃないか。同じ女と長くつきあうと、必ず向こうの方が権力をもつものだって」

父親にあるまじきアドバイス。だがそれに僕が答えるより早く、「サイキ インヴェステイグイション」のドアが蹴破られかねない勢いで開いた。

「隆！」

血相をかえた康子が立っておる。チューブトップにヘソだしジーンズという、かわいらしいでたちだが、怒ったその顔は、愛児を燃やされ、復讐に狂ったマザーエイリアン。

「だから——」

「いや、ちよつとこれにはワケが」

同時にあたふたする冴木親子。

ずかずかとリビングの中ほどまで進んできた康子は、僕の胸ぐらをつかんだ。

「どういう気、あんた。セコいばっくれ方しやがって。会うのが嫌なら嫌と、はっきりそういえばいいじゃんかよ」

「ちがうんだ、ちがうだよ、バイトがちと忙しくて……」
「バイトお？」

康子の三角アイズが僕を吊るしあげたまま、親父に向けられた。

「いや、俺は知らん、どうも最近、学校がヒマなのをいいことに、怪しいバイトに精をだして
おつて、今も説教しようかと——」

「オヤジ！」

さっさと安全地帯に逃げこもうとするこの破廉恥さ。

「何のバイトだよ」

「渋谷で……」

「何を」

「盗品故買」

「は？」

「それとA T M強盗の手伝い」

「マジで？」

「うん」

「殺す」

康子の手がジーンズの腰に巻いたチェーンにのびた。

「いやいや、ちよつと康子、待てよ」

ようやく親父が止めに入った。康子の腰から外れたチェーンはくるくると拳に巻きつけられ

る。

「これには、その、なんだ、ワケがある」

「あたり前じゃん。いくら金に困ったからつて、隆がそんな真似するわけない。あんたがやらせているんだろ」

「いや、俺、じゃない」

康子が僕をにらむ。

「じゃ、やっぱりあんた——」

「だから聞けよ」

「聞いてるよ」

「いや、これはキョーハクだから」

「ごちゃごちゃいわないで、早く吐きな」

チェーンを巻きつけた拳がつきつけられる。

「わかった、いうよ。僕のいつてる都立K高の生徒が、ここんとこたてつづけに万引きでパくられたんだ。いろいろ聞いてみたら、ゲームやDVDのソフトを高く買う故買屋が渋谷にいて、いきつけのクラブ周りでビラをまいてるつていうんだ。そこは、盗まれたソフトを裏で流したり、他人名義の銀行口座や携帯を高校生に作らせてそれを売るのが商売にしているみたいなんだ。社長つてのは表にでず、危い仕事は全部、アホな高校生をバイトで雇つてやらせてる」

「で、あんたもそのアホな高校生の仲間入りをしたわけ？」

「そう。今夜で終わりだけど」

「なんで？」

「近所の工事現場にあるウンボをかつぱらいにくる。きつとATMを壊して現金強奪に使うから、あとはアシがつかないように、情報提供した僕はクビになる」

康子はあるように目玉をぐるりと回した。親父を見る。

「なんでそんなバイト許したの？」

「こいつが勝手に見つけてきたんだ。俺は面倒なことになるからやめとけっていったのに」「ちゃんと相談したじゃん」と僕。

と僕。

「始めてからだろ」

「決着つけるには、やっぱり国家権力が必要でしょうが」

「お前ね、そんな世直しゴッコやったって、東大の推薦入学は無理だぞ」

「そんなことのためじゃないよ。アホ高校生をこれ以上増やしたくないの」

康子は僕と親父を見比べ、ようやく僕から手を離れた。

「隆の気持はわかるよ」

「だろ。万引きやる奴はアホだけど、そのアホにつけこんで金儲けするのは、あくどすぎる」

「組がついてんの、バックに？」

「メイビー、パハップス」

「じゃそいつらがでてくるんだ」

「オア、チャイニーズマフィア」

たぶん混成部隊だろう。最近は、上納金の締めつけが苦しくて、中国マフィアと手を組むヤクザが増えている。

康子は天井をにらんだ。

「で、手筈は？」

「何の？」

「何のじゃないよ、今夜の手筈だよ」

「あの、人気レースクイーンにそういう話は関係ないでしょ」

「何だって？ あんたひとりじゃ心配だからつきあってやろうっていつてんのがわかんないの
よ」

「いや、それはちょっと……」

「怪我とかさせちゃマズいだらう」

親父がいった。

「こいつはそういうのには慣れてるからいいが……」

ヒトサライ、カクベエジシの親方みたいなことをいう。

「いや、駄目だね。隆ひとりじゃ危くて放つとけない」

「康子——」

「あたしもつきあうからね。デートすつぽかした罪滅ぼし」

僕は親父と顔を見合わせた。

「しかたない、連絡係でもやってもらうか」

親父がため息を吐いた。

2

社長から連絡があったのは、午前二時を十分ほど回った時刻だった。

「ごめん、ごめん、ちょっと手配に手間どっちゃって」

あいかわらずノリの軽い社長。この軽さが、アホ高校生に重大犯罪の片棒を担いでいると思わせない秘訣なのかもしれない。

「大丈夫かな？ でてこられる？」

「オッケーっす」

「じゃ、天現寺橋の交差点のとこまできてくれるかな？ 車で拾うから。BMW」

了解、と答えて電話を切った。ベッドの隣でさっきまで寝息をたてていた康子がぼつちり目を開いた。

「いくの」

起きあがった拍子に、みごとになおっぱいが毛布からこぼれ、もう一回イク、とお願ひしなくなった。

「いく」

とだけ答えて、僕はベッドを降りると、ジーンズを身につけた。親父は二時間ほど前にでかけ

ていた。

「親父に連絡しといて。待ちあわせは天現寺橋の交差点。目印はヤンキースのキャップ」

ベッドからでて衣服を着けている康子に告げた。

「わかった。隆、気をつけてね」

「うん。帰ってきたら、も一回する？」

「馬鹿」

部屋をでて階段を降りた。バイクでいくことも一瞬考えたが、ナンバーを覚えられたりするとまずい。結局、二本の足で天現寺橋まで向かうことにした。

天現寺橋の交差点、渋谷から明治通りを外苑西通りに左折した場所に、そのBMWはハザードを点して止まっていた。歩きながらあたりを観察すると、五十メートルほど離れて、大型のトレーラーと別の乗用車が二台止まっている。

BMWの中には、運転席に社長がひとりいるきりだ。

「ご苦労さん、はい、これ」

助手席に乗りこんだ僕に、社長は一万円札を二枚さしだした。

「どうも。この先を右折して下さい」

僕はいった。社長はハザードを消し、BMWを発進させた。

「いやあ、助かるなあ。ホント、冴木ちゃんみたいに気をつく社員がウチにもついたら、社長は楽なんだけどね」

「あ、そこ左です。一通入って下さい」

BMWは人けのない商店街に入った。

「ここです」

建設途中の和菓子屋さん跡地を僕はさした。社長はわずかにスピードを落としたが、その前で止まることなく走り抜けた。

「オッケー！ 確かにありました。じゃ、送ってくよ。あとはこっちの仕事だから」

「いや、その辺で落として下さい。どうせでてきちゃったのだから、西麻布のクラブでもいって遊んできます」

自宅をマークされるのは、ちとマズい。

「そうかい？ じゃそうするけど……。若いね、やつぱり。今からオールで遊ぼうなんてさ」

「軍資金、できましたから」

「そのクラブ、冴木ちゃんみたいな高校生、よくくるの？」

危い、危い。適当にフカシただけなのに、本当に商売熱心な社長だ。これで、くると答えようものなら、ついてきてバイト高校生探しに使おうといいだしかねない。

「いや……。おミズの子が多いみたいです」

「そっか……」

昔馴染ななじみに会っちゃマズいと見たか、社長はブレーキを踏んだ。

「じゃ、ここで。また電話するから、そのときはよろしく」

BMWは商店街の外れで僕を落とし、走り去っていった。そのテールランプが見えなくなるのを待って、僕は携帯をとりだした。

「オープンチャンネルD、オープンチャンネルD、こちらナポレオン・ソロ」

DVDボックスでハマった、古き日のスパイドラマの合言葉を送りこむ。

「はいよ。こちらイリヤ・クリヤキン。ジャンル本部」とは話がついてる」

親父の声が流れこんだ。

「でかいトレーラーも確認済みだ。奴やつこさんたちがウンボをかつぱらって積みこんだら御用。ひっぱって行って、余罪を吐かそうって手筈になってる」

「オッケー。じゃ、先にアパートに戻ってる」

電話を切ったとたん、僕は背後からアップパーにしたヘッドライトに照らされた。ふりかえると目がくらんだ。何だろうと思う間もなく、僕の横で急停止したのは、行った筈の社長のBMWだった。

「社長——」

「やつぱさあ、冴木ちゃんみたいに使える子は、今夜ひと晩つきあってほしいワケ。仕事のイロハ教えるから、これからいっしょにやんない？」

サイドウィンドウを降ろして社長はいった。断られる雰囲気は、まるでなかった。

「このウンボ、何に使うかは、だいたい想像つくよね」

トレーラーにくっついてきた乗用車から降りた男二人が、ウンボの運転席に乗りこむのを見ながら社長がいった。

「全然」

僕は首をふった。社長はニタツと笑った。

「またまた。賢い冴木ちゃんが気がつかない筈ないでしょう。スーパーとかの駐車場にあるATMぶっ壊すのよ。中は札束ぎくぎく」

「それって犯罪ですよね」

「そうだよ。君も共犯」

社長は僕の肩に手を回して囁いた。

「ま、つかまつても君は十代だから、悪くて少年院でところかな」

「嬉しくないですよ」

「でもさ。ラクしてお金儲けようと思ったら、多少のリスクは覚悟しなきゃ」

「リスクって、二万円ですよ、僕のバイト料」

「それは情報提供料。このあと仕事をすれば、またそのぶんギャラは入るよ」

ウンボのエンジンがかかった。どういう仕組なのか、男たちがとりついてから一分もかかっていない。

声をかけあうこともなく、作業は黙々とそしてテキパキと進んでゆく。トレーラーが建設現場に横付けされると、ウンボが荷台にあるためのレールがわりの板が二本、別の車の男たちの手で降ろされた。

社長がBMWの窓から手を入れ、ライトを点けた。ウンボのキャタピラがレールを踏み外さないための照明だ。

ウンボを運転しているのは、黒いキャップに皮ジャンを着た細身の男だった。レールをさし渡

した二人組は、ナイロンのスポーツウエアをつけたヤの字業界風。

ウンボはカタカタとレールを登り、トレーラーの荷台におさまった。社長がBMWのドアを開けた。

「こっからが本番。さ、乗んな」

「いや……。でも……」

とりあえずうるたえるリュウ君。

「乗れよ」

社長の口調がかわった。

「ここでビビった小僧放りだして仕事いけるわけねえだろう。お前、乗らなかつたらこの現場に埋めてくぞ」

やむなく僕は助手席に乗りこんだ。イリヤ・クリヤキンとの手筈とは大きく異なるがやむをえない。願わくは、この番狂わせを「アングル本部」が気づいてくれているように。

セダンその一が先導し、そのあとをトレーラー、そしてBMW、セダンその二の順で、車の隊列はその場を離れた。

社長が携帯のイヤフォンマイクに声を送りこむ。

「こちら本社。今日の営業は、蒲田のショッピングセンターだ。法定速度を守っていきましよう」

商店街の出口に向け、隊列は進行した。セダンその一が出口にさしかかったとたん、赤いパトライトが閃いた。覆面パトカーが通せんぼする。

「ヤバッ」

僕は思わず叫んだ。社長は舌打ちした。急ブレーキを踏み、シフトをバックに入れて、背後をふり返る。商店街の入口にもパトカーが止まっていた。

「何だよ、何だよ」

社長はつぶやいた。直後に気づいたらしく、僕を見た。

「お前、チクったな!？」

「何のことですか」

とぼけたが遅かった。社長はジャケットの下からいきなりトカレフをひき抜いた。

「ふざけんな。どうも調子こいてると思つたら、お前、サツの下請けかよ」

下請けとはあまりに哀しい表現。にしても、まさかこのイケメン風がトカレフで武装しているとは思わなかった。

「わかつてる、うるせえっ」

社長はイヤフォンマイクに怒鳴ると、トカレフを僕につきつけた。

「いいか、動くなよ。降りようとしたら、ぶちこむぞ」

ばらばらと警官が、BMWやトレーラーをとり囲んだ。社長がサイドウインドウを細めに降ろす。

「お前ら、パトどけろ！ さもないとこのガキの頭、ふつとばす」

車外の警官に向かって叫んだ。安全装置のないトカレフの撃鉄はしっかり起きあがっている。これがよくできたモデルガンでもない限り、ちよつと逃げられそうにない。

警官はあつげにとられたように中をのぞきこんだが、叫び返した。

「ふざけるな。仲間を人質に見せかけようつたつて、そうはいかんぞ。早く車を降りろ！」

いや、そうじゃなくて、と説明したいリュウ君。

「誰が仲間だ、こんなガキ。だったら試しにぶつ殺してやろうか」

「いや、それはやめましょうよ」

「うるせえ！」

警官たちは顔を見合わせた。前方では、トレーラーの運転手たちがお縄おなづなになっている。

「もう、他の仲間はつかまつてるんだ。悪あがきせずに降りなさい！」

スーツに防弾チョッキを着けた刑事が近づいてきていった。

「いいから、パトどけろっ」

社長はサイドウインドウを大きく降ろすと、いきなり空に向けて引き金をひいた。パン、という乾いた銃声が商店街にこだまし、警官隊がささつと後退した。

「お前、車の運転できるか」

すぐにまた窓を閉め、社長は小声で訊ねた。

「ちよつとは」

「だったら俺が降りてそっちへ回るから、中で運転席に移れ。逃げようとしやがったら、撃つ。いつとくが俺は、ハワイのシューティングレンジで働いてたことがある。狙ったのは外さねえかな」

社長はBMWのキイを引き抜くと、運転席を降り立った。この期に及んでも、頭は回っている

ようだ。運転を代われといわれたら、その場でエンジン吹かして逃げようと思っていたが、それも見こしている。

フロントグラスごしに僕に銃口を向けながら、ゆうゆうと社長は助手席に乗りこんだ。キィを僕に渡して命じる。

「よし、エンジンかけろ。バックするんだ、ゆっくりとだぞ」
やむなくいわれた通りにした。BMWが後退するにしたがい、とり囲んだ警官たちも移動した。今は大半がジュラルミン製の楯たての陰に隠れている。

通せんぼしたパトカーぎりぎりまで、僕はBMWを下げた。

「無駄な抵抗はやめて降りなさい！」

刑事が叫んでいる。

「誰が止めるつつた。押せ！」

社長は命じた。トカレフの銃口は、僕の横腹に押しつけられている。変にドスンと動かしたら暴発、即あの世いきの状況。

「あの……」

「何だよ」

「それ、ちよつと離して下さい。まちがつてバキュン、恐いから」

「別に俺は恐くねえな」

性格を見誤っていたようだ。イケメン社長、妙に腹がすわっている。

「でも僕を撃つたら罪重くなりますよ。社長は少年院ですみそでもないし」

「わかってるよ。けどよ、お前、つかまったトレーラーの連中、見たろ。あれ福建ふくけんのマフィアでな、ずつとうちと取引してた連中だ。奴らの上に、別のボスがいて、俺のこともよく知ってる。今度のこれは、どう見ても、俺のミスだ。お前をサツの下請けと知らず、ひっぱりこんだのだからな。つまり俺も責任をとられるってことだ。奴ら、ヤクザとちがつてシビアだからよ。指の一本二本じゃすまねえんだ。わかるだろ。ここで死ぬのも、中国人に殺されるのもいっしょなんだよ」

わかりたくありません。

「ほら、車下げる」

トカレフで突つかれた。BMWのリアバンパーが止まっているパトカーの横腹にめりこんだ。

「こらっ、何するっ」

「止めんか、おいっ」

メリメリ、という音をたてながら、BMWはパトカーを押しつけていった。

「タイヤ撃つぞっ、やめろっ」

「ガキを撃つ！」

窓を降ろし、社長は怒鳴った。

「いいか、このガキは、うちでバイトに雇った高校生だ。道案内させただけで、俺らのことは何も知っちゃいない。こいつが死んだら、手前てまえら警察の責任だからな」

責任という言葉に弱いのは、公務員の常だ。顔を見合わせるが早いか、警官、刑事はささっと銃をひっこめた。

「ようし。俺らはこれから羽田に向かうから、飛行機用意させとけ。燃料満タンで、アメリカでもどこでも飛んでいける奴だ。いいなつ。信号も無視する。事故ったら即座にこのガキはアウトだ」

アメリカまで飛ぶといつても、このご時世だ。ファントムに撃墜されるのがオチだと思うけど。

「馬鹿なことをいうな。逃げられるわけがないぞ」

口々に叫ぶ公務員。だがナススベもなく、BMWがバリケードのパトカーを押しつけるのを見つめている。

そのとき一台のパトカーがするすると動きだし、少し離れたところで止まった。スピーカーから声流れだす。

「わかった。空港まで先導する。ついてきなさい」

そんな話は聞いてないとあつけにとられている警官たちがいる。それも当然で、スピーカーから流れたのは、涼介親父の声だった。

「おい、ちょっと待て——」

パトカーに走りようとする警官を見て、僕も腹を決めた。

「つかまって下さい！」

アクセルを思いきって踏みこむ。社長も銃口をそらし、ドアにつかまった。急加速してバックしたBMWのサイドブレーキを僕は一気にひきあげると、ハンドルを大きく切った。BMWはくると一回転し、パトカーの尻に鼻先を向けて止まった。

「やるな、お前」

社長が驚いたようにいった。パトカーがライトを点滅させ、サイレンを鳴らして発進した。それにつづいて発進する。

パトカーとBMWの二台はびったりくっついて、天現寺橋の交差点をつきつた。パトカーにはひとりの人影しかない。パトカーはBMWに押されるようにして、みるみるスピードをあげた。

ミラーをのぞくと、遅ればせながら、泡を食った他のパトカーがくっついてくるのが映っていた。だが距離はかなり開いている。

「お巡りの中にも、けっこう決断の早い奴がいるもんだね、冴木くん」

走りだすと少し落ちついたのか、社長は元の口調に戻っていた。

「そうですね」

「これで本当に飛行機が用意してあったら最高なんだがな……」

「え？」

「そんなうまくいくわけないだろ。いいか、次の信号越えたら、急停止しろ。車は右に寄せておいていい」

社長は淡々といった。

「お前のことはわかってるから、いずれ挨拶あいさつに行く。冴木隆くんだったな。学生証のコピーもあるからよ。よし、止まれっ」

いきなり社長は叫び、僕は急ブレーキを踏んだ。止まるが早いか社長は助手席のドアを開ける

と、中央分離帯を乗りこえた。

前方でも急ブレーキを踏む音が聞こえた。親父がスピランタンさせ、パトカーをこちらに向け、猛スピードで走らせてくる。

外苑西通りの反対車線は、タクシーの空車が流れている。そのうちの一台が、手をふる社長に急停止した。さっと開いた自動ドアに社長は乗りこんだ。

そのときようやく、後続のパトカーがBMWのバックミラーに映りこんだ。

親父のパトカーがBMWの進路を塞ぐように止まった。親父が運転席からとびだしてくる。

「隆！」

「大丈夫」

BMWのドアを開き、僕は答えた。社長の乗ったタクシーは突進してくるパトカー群とすれちがうようにして、都心の方角に呑みこまれていった。

3

「つかまったのは、福建出身の中国人二名に、暴力団の準構が二名だ。この二名は所属する組のシノギがきつくて、アルバイトに中国人と組んだらしい。ひと昔前なら、ヤクザが中国人を下請けに使うことはあっても、その逆はなかった。ご時世だな」

島津さんがいって、首をふった。翌日の午後、広尾サンタテレサアパート二階の「サイキイ

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。